

訳 10 それを見てある人が言うことに  
は、「『かきつばた』という五  
文字を各句の頭に置いて旅の思  
いを詠め。」と言つたので（男  
が）詠んだ（歌）。

訳 11 |からころも |き|つつなれにし  
|つましあれば |はるばるきぬる  
たびをしづ思ふ

## 問一

四句目が「ば」ではなく、  
「は」から始まつていて。こ  
れは「ある人」の指示に違反  
しているのではないか。

ア 当時、「」は発明されておらず、  
「ば」という文字はなかつた。あ  
る人の指示も当時の書き方で書け  
ば「『かきつばた』という五文字  
を各句の頭に置いて旅の思いを詠  
め。」になるので、指示に違反し  
てはいない。

イ 当時、すでに「」はあり、  
「ば」という文字があつたから、  
指示に違反したことになる。

訳――からころも きつつなれにし  
つましあれば はるばるきぬる  
たびをしそ思ふ

問二 からころも きつつなれにし  
つましあれば はるばるきぬる  
たびをしそ思ふ

(注) 「着つつ」という言葉の前に  
置かれて いる言葉（「唐  
衣」）を何と呼ぶか。

「着る」という言葉の前に  
「唐衣」という語を置くこと  
が伝統的に行われていた。

### ア枕詞

- ある言葉の前に置くことが伝統的に決まって いた言葉（例「奈良」の前に置く枕詞は「あおに よし」）。
- 原則五音。

### イ序詞

- あとに来る言葉の印象を強めるために置かれるフレーズ。
- どういうフレーズにするかは歌人の自由。
- 原則七音以上。

訳――からころも きつつなれにし  
つましあれば はるばるきぬる  
たびをしそ思ふ

問三

この歌のように、和歌の五・  
七・五・七・七の各句のはじ  
めに決まつた文字を置いて歌  
を詠むことを何と言うか。

ア掛詞

イ枕詞

ウ折句

エ縁語

|訳 II

からころも

唐衣(=着物)を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになつた慣れ親しんだ」

「つま」し「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張つて」はるばる」

「着」来」た

たびをしづぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問四

この歌のように、ある言葉  
(唐衣)と関係する語(よれ  
よれになる・すそ・張る・着  
る)をちりばめる技巧を何と  
言うか。

ア掛詞

イ枕詞

ウ折句

エ縁語

|訳 II

からころも

唐衣(=着物)を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになつた慣れ親しんだ」

「つま」し「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張つてはるばる」

「着来」た

たびをしづぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問五

この歌のように、一つの言葉  
に二つの意味を持たせる（す  
そ・はる・着る）を和歌の中  
にちりばめる技巧を何と言う  
か。

ア掛詞

イ枕詞

ウ折句

エ縁語

からころも

唐衣(=着物)を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになつた慣れ親しんだ」

「つま」「あれ」ば

「すそ一妻」が「ある」といふので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張つて」はるばる」

「着」来」た

たびをしご思ふ

この旅をしみじみ思う

問六 この歌の正しい説明は?

ア妻への思いをストレートに歌つて  
いる。

イまだ旅の序盤で、表だつて妻への  
思いを歌うわけにもいかず、その  
思いを着物の調子をユーモラスに  
歌う中に潜めている。

ウまだ旅の序盤で、表だつて妻への  
思いを歌うわけにもいかず、その  
思いを着物の調子を格調高く歌う  
中に潜めている。

このは空白ページです